内閣府認定 公益社団法人 色彩検定協会

A·F·Tジャーナル

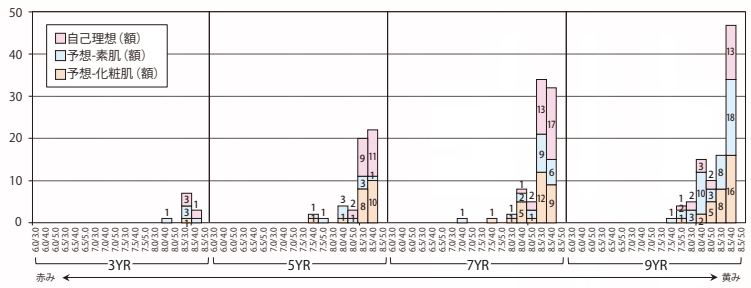
色彩の新しい世界を開くコミュニケーション&情報発信ペーパー

公益社団法人 色彩検定協会　■ホームページ www.aft.or.jp
●東京オフィス 〒100-0011 東京都千代田区内幸町1-1-1 帝国ホテル6F　●大阪オフィス 〒532-0003 大阪市淀川区宮原3-4-30 ニッセイ新大阪ビル16F

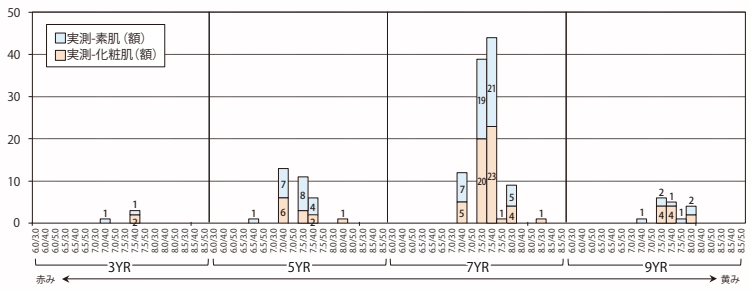
vol.62 / 2016 Autumn

肌と色彩の心理学

第3回 肌をめぐる理想と現実



01 自分自身の肌（額）に対する理想と予想（対象:女子学生81名）　※1YRの色域に対する2件の選択のみ割愛



02 肌（額）の実測結果（対象 **01** と共通）

「理想と現実」と並べて表現されるように、両者はしばしば対比され、その隔たり、乖離（かいり）が指摘されます。肌も例外ではありません。

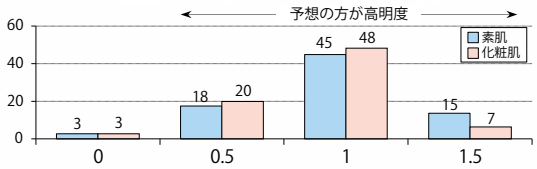
あなた自身の理想の肌の色を尋ねられたとしたら、あなたはどのように答えますか？　現在の肌の色を問われたときと同じ答えが出てくるでしょうか？

01は、色見本からの選択結果をまとめたグラフです。ここで捉えられるのは若い女性の傾向だけですが、理想と現実に対する予想の分布の違いはあまり見られません。しかし、選択する色が完全に一致した人は、素肌に関して約6%、求める理想をある程度実現できるはずの化粧後の肌でも約22%に留まりました。程度の面では当然個人差がありますが、肌をめぐる理想と現実も、やはりある程度違うものとして捉えられているようです。

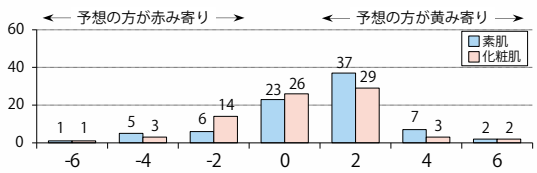
ここまでは、回答する人それぞれの頭の中でのお話。更に面白いのは、その人が想像する「現実」が、本当の現実、つまり、実際に計測された肌の色と大きくずれる傾向にあるということです。

02は、その実測結果を表しています。一見しただけで、**01**の分布と全く異なることにお気づきでしょう。まず、右側の9YRの枠から左側の7YRの枠に頻度の山がシフトしています。そして、色相（色み）の各区分の中でも、それぞれ左側にピークが移動していることが読み取れます。つまり、客観的現実は、黄み・明るさ共、頭の中の想像ほどではないのです。

この話題はこれで終わりません。先のような、「客観的現実は、黄み・明るさ共、頭の中の想像ほどではない」、言い換えれば、想像上の現実の方がより明るく黄み、というずれの方向性は、全体を捉えたものに過ぎません。**03**や**04**のグラフが示すように、より細かく見ると、明るさのずれが僅かな人もいれば、赤み方向に予想がずれる人もいるということが分かってきました。



03 自分自身の肌（額）に対する予想と実測の明度のずれ（対象 **01** と共通）



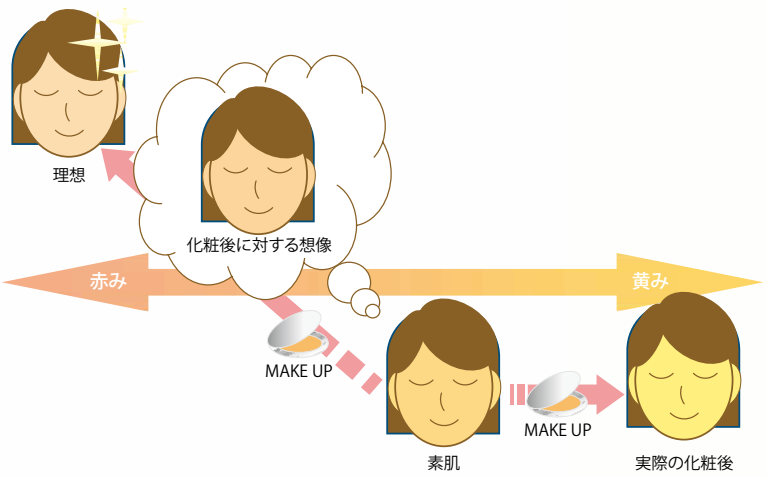
04 自分自身の肌（額）に対する予想と実測の色相のずれ（対象 **01** と共通）

更に、この分析の過程から気になる現象も見つかりました。皆さんは、メイクによって自分の理想と反対の方向に肌の色を変えたいと思いますか？　舞台演出などでない限り、敢えてそうなさる方は少ないかと思うのですが、赤み方向に予想がずれる人たちは、まさにそのようになっている実態がありました。**05**の図のように、理想の肌の色として赤み方向を望んでいるというのに、実際には額の色が素肌よりも黄みに変化していたのです。

鏡や写真という手段はありますが、自分の顔も、顔部分の肌も、自分自身の目で直接確かめることはできません。だからこそ、想像で大幅に補われています。自分のものでありながら現実に近づけない、それが顔の肌なのかもしれません。

この記事でご紹介してきたように、心理学は、皆さんの感じ方、捉え方、考え方の部分から既に始まっています。肌という身近な対象を入口に、色彩心理学の分野も是非覗いてみてください。

埼玉女子短期大学 国際コミュニケーション学科
教授　山田 雅子



05 化粧による肌の色の変化と想像の乖離（想像が赤みにずれる人のパターン）

本研究結果は、額の肌の色について得られたものです。図式として簡略化するため、顔全体の肌の色を変化させていることをご了承ください。

今秋開催される日本色彩学会平成28年度研究会大会において、本稿（春・夏・秋号）の内容をベースとした講演が予定されています。詳細は、日本色彩学会公式ホームページをご覧ください。